

# 会話におけるものの重さの表出：個人の認知から相互行為の認知へ

## Representing the weight of things in conversation: from individual cognition to interactional cognition.

細馬 宏通  
Hiromichi HOSOMA

早稲田大学  
Waseda University  
hhosoma@waseda.jp

### 概要

ダイナミック・タッチは従来、個人によるものの形や重さの知覚に関わる動作として研究されてきた。しかし、ものを揺する動作は対面相互行為において視覚情報として相手に伝わり、ものの重さの表出となって立ち現れうる。本発表では、ダイナミック・タッチが発話の随伴動作となって表れ、重さを相互に評定しあう行為に関わる場面を分析した。その上で、個人内の認知に伴う動作は、相互行為に援用され、個人間に開かれうることを示した。

キーワード：ダイナミック・タッチ、対面相互行為、会話分析、マルチモーダル分析

### 1. はじめに

ヒトはものの形や重さを知覚しようとするときに、手を振ったり揺らす動作を行うことがある。このような知覚は生態心理学ではダイナミック・タッチ[1]と呼ばれている。従来、ダイナミック・タッチは、個人によるものの知覚に関わる動作として研究されてきたが、この動作が相互行為においてどのような影響を持っているかを研究したものは管見の限り見当たらない。しかし、ものを揺する参加者に対面している他者にとって、ダイナミック・タッチは視覚情報であり、さらにそこには、揺する行為に随伴する発話という聴覚情報が組み合わされ、ものの重さの表出となって立ち現れる。そこで本研究では、実際の相互行為において、ダイナミック・タッチに伴ってどのように動作が時間構造化され、それらがどのような発話とともに行われ、組織化されていくかを考える。

### 2. 方法

『日本語日常会話コーパス』(CEJC) [2][3]から重さに関する会話を含む会話を検出し、その内容を比較検討した。この発表ではそのうち、複数のメンバーが同じものの重さを評価しあっている事例を検討する。事例1, 2, 3は5人の友人(夏樹, 玲子, 美沙, 美香, 可奈)

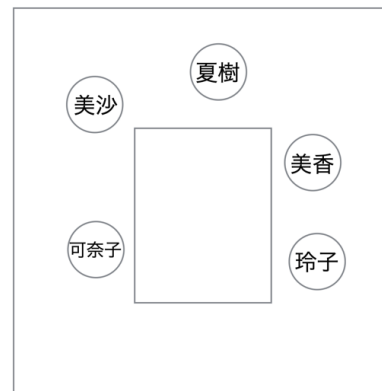


図1. 事例1, 2, 3の5人のメンバー(美沙, 夏樹, 美香, 玲子, 可奈子)の配置

子)の食事会の連続する3つの場面である(図1)。会では、メンバーの誕生日の際、事前に本人からプレゼントをリクエストしてもらい、贈呈することが恒例となっている。夏樹はガラス製の大きな花瓶をリクエストし、美沙が店舗まで品物を取りに行き、箱を自らラッピングして会場まで運んできた。そのため、美沙のみが実物の重さを知っており、他のメンバーは知らない。事例1では、美沙から夏樹にプレゼントが渡され、事例2では夏樹から美香に、事例3では美香から玲子にプレゼントは次々と渡され、各人がその重さを評価する。

### 3. 結果

#### 3.1 渡し手のダイナミック・タッチ

事例1(表1)で、美沙は夏樹に向かってプレゼン

01 美沙	わた[しも渡したい]
02 夏樹	[あー重い] :?
03 美沙	あの:えーとね 重い
04 美沙	あの:わたし包んだので
05	ちと汚いんです[けど]
06 玲子	[L]

表1. 事例1のトランスクリプト。

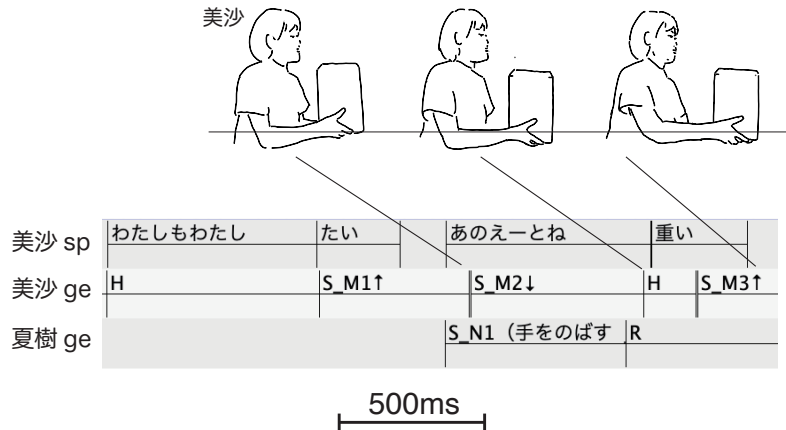


図2. 事例1における美沙によるダイナミック・タッチの表出. 美沙 sp: 美沙の発話, 夏樹 sp: 夏樹の発話, 美沙 gp: 美沙の動作, 夏樹 ge: 夏樹の動作. S: 動作のストローク (腕の振り上げ・振り下げ), H: 動作の一時停止, R: レスト (ホーム) ポジションへの復帰.

トを両手で掲維持したまま, 1行目で「わたしも渡したい」と言ったあとプレゼントを上前方に差し出しかける (図2:S\_M1). この発話に重複して, 2行目で夏樹が「あー重い: ?」と重さに関する質問を行う. この直後, 美沙は渡す動作から急に方向を変え, 両腕を下方に沈ませてから170ms停止させるダイナミック・タッチ (図2:S\_M2, H) を行いながら「あの: えーとね」と発話し, 再び持ち上げながら (図2:S\_M3) 「重い」という評価発話を行う (表1, 3行目). この間, 夏樹はプレゼントを受け取ろうとした手をいったん引っ込める (図2:S\_N1, R).

### 3.2 ダイナミック・タッチとポジティブな評価

事例2は, 事例1の続きである. 美沙からプレゼントを手渡された夏樹は, 即座に「は: : : いや hhh」 (7行目) と笑い声を含ませながら重さに従うよう

に両腕を下げた (図3:S\_N5) のち, 再び持ち上げる (図3:S\_N6). そして持ち上げが終了した直後に「あ」と間投詞を發し「おも: : : い」と評価発話を行った (9行目). ここで興味深いのは, すでに7行目で間投詞と動作 (図3:S\_N5) によってプレゼン

07 夏樹	↑は: : : いや [hhh]
08 美沙	[おも]い重い(.).° 重い重い
09 夏樹	あ [おも: ]い
10 美沙	[これで]
11 美沙	こうやってから
12	↑重いこれけっ [こう]
13 美香	[ああ]
14 夏樹	[えー]
15 夏樹	[おもーい]
16 美香	[ほんとだ] [ああ: ]
17 美沙	[重いっしょ]:

表2. 事例2のトランスクリプト.

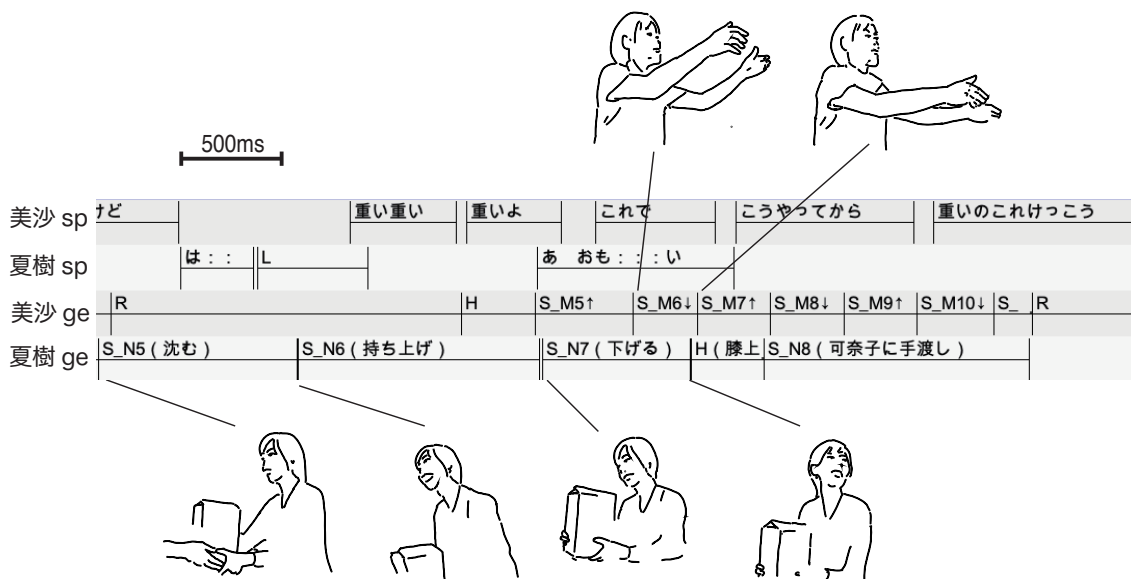


図3. 事例2における夏樹, 美沙によるダイナミック・タッチの表出. 記号は図2を参照.

トの重さを表しているにもかかわらず、さらに持ち上げ動作(図3:S\_N6)によってダイナミック・タッチが進行した直後に「あ」が発せられたことである。日本語の応答詞「あ」は、発し手の新規情報を表す[4]だけでなく、自他の動作にタイミングを合わせることで、「あ」の指示する対象がその動作であることを表し、相互行為に寄与することが知られている[5]。9行目の「あ」もまた、最初の沈み込みの動作だけでなく、その後続く持ち上げによって、夏樹の重さに対する感覚が更新され、隣にいる美香に向けて改めて重さの評価が行われたことを示していると考えられる。

一方、夏樹の美香への視線変化を見ていた美沙は、美香に視線を移動させ、「これで、こうやってから」(10-11行目)と言いながら、プレゼントを持っていない両手を繰り返し上下させて、ダイナミック・タッチと同じ表象的動作を行う(図3:S\_M5-10)。物を持たずに腕を揺すって重い物を持つ様を表すジェスチャーは、日本語日常会話コーパスの他の事例でも見つかった。このようなジェスチャーをここでは「ダイナミック・タッチ表象」と呼んでおこう。

美香は夏樹からプレゼントを渡されると同時に「ああ」と発し(13行目)、腕を下げながら「ほんとだ」と、重さに対して、肯定的な評価発話を行った(16行目)。ここで美香は夏樹のように「あ」ではなく「ああ」を発していることは興味深い。「あ:」は、話者が理解を示すとともに何らかの既知の情報を持つ場合に発せられやすいことが知られている[4]。美香の

重さに対する間投詞は、自身のダイナミック・タッチのみによる独自の評価というよりは、先行する美沙や夏樹による既知の評価を肯定するようデザインされており、それは「重い」ではなく「ほんとだ」と先行発話を裏付ける内容になっていることとも一致する。さらに注意すべきは「ほんとだ」の発話のあとに改めて「ああ」(16行目)が発話されていることである。このとき美香は300msの間、両腕を上げるダイナミック・タッチを行っている。夏樹の場合同様、美香もまた、自らのダイナミック・タッチによって重さの感覚を更新し、それが発話に表れていると考えられる。

3.3 ダイナミック・タッチとネガティブな評価

続く事例3では、美香から玲子にプレゼントが手渡される。玲子は箱を受け取った(図4:S\_K1)あと、一度無言で上下させて(図4:S\_K2,S\_K3)からホルドしながら、「あ」と間投詞を発し、「まあそうね」(18行目)と評価発話を行った(図4下)。ここで、玲子も夏樹と同じく「あ」を発しているのだが、夏

18 玲子 あ まあそうね:??  
 19 美香 [まあでも花瓶だからしょうがないか:]  
 20 美沙 [あのね(.)今ここの膝で持つとまあ ]  
 21 美沙 =そうね:[だけど:]  
 22 玲子 [うー ]ん  
 23 美沙 手で持つ[たらけっこう:]  
 24 玲子 [持ってもXX ]  
 25 玲子 そりゃそうだよな?  
 26 美沙 結構重かった

表3. 事例3のトランスクリプト。

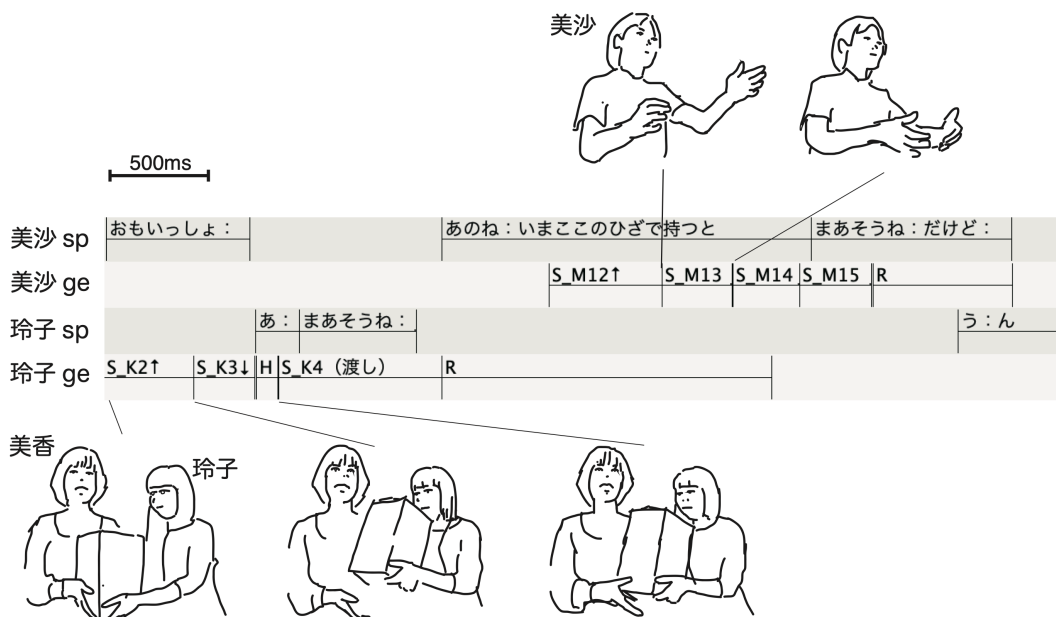


図4. 事例3における玲子、美沙によるダイナミック・タッチの表出。記号は図2を参照。

樹がダイナミック・タッチを行いながら「あ」を発話した(図 3:S\_M5)のに対し、玲子はダイナミック・タッチを行ったあとといった腕をホールドしながら「あ」を発話しており(図 4:S\_K4)、「あ」はダイナミック・タッチ自体ではなく動作の停滞と結びつけられている。さらに、続く「まあね」という発話は、今ここの出来事を問題性を孕むものとして捉えるスタンスを表している[6]。以上のことから「まあそうね」は、夏樹や美香の発話に比べて、重みに対するややネガティブな評価になっている。

実際に、玲子の18行目の評価は、花瓶を会場まで運んで来た美沙にネガティブな表現として取り上げられ、「あのね、今ここの膝で持つと『まあそうね』だけど」(20, 21行目)とダイナミック・タッチ表象(図4上)を伴う発話によって引用され、さらに「手で持ったらけっこう、けっこう重かった」と反論される(23, 26行目)。これに対して玲子は「そりゃそうだよな?」(25行目)と自身の見解を訂正する発話を行っている。ここでは詳しく取り上げないが、このあとの事例で箱から出した花瓶自体が再びメンバーによって持たれるが、今度は玲子は花瓶を持った直後に「あ」と間投詞を発し、花瓶を上下に振るダイナミック・タッチと並行して、「でもこれ、なんかこれだけで持つと、さっきのより重い気がする」と発話し、評価を改めている。

#### 4. 考察

以上の分析では、重さの評価をしあう友人たちの会話の事例を取り上げ、そこでダイナミック・タッチの動作と発話がどのようなタイミングで組織化されるかを見た。まず、いずれの場合でも、重さの評価に関する発話は持った直後、もしくはダイナミック・タッチが行われた直後に行われていた。次に、過去の持ち手の評価に対して肯定的な評価が行われた例(美沙から夏樹、夏樹から美香)では、まず持った直後に間投詞が発せられ、次に評価が行われていた。一方、否定的な評価が行われた例(美香から玲子)では、間投詞の発話がダイナミック・タッチの後に起こり、その後に留保を伴う発話が行われた。Pomerantz[4]は、発話の選好性を論じ、先行発話に対して肯定的な発話を行うときに比べて、非選好的な発話ではさまざまな遅延が起こることを示したが、この事例における玲子の行為では、重さを感じるダイ

ナミック・タッチの動作から発話が遅れることによって、先行発話で行われた評価に対する留保が表されている点で、従来とは異なっている。

事例では、空の腕を動かす「ダイナミック・タッチ表象」も観察された。ダイナミック・タッチ表象は、自分が持っていない物の重さを表現するときに用いられる他、相手のダイナミック・タッチを引用したり、相手に対してダイナミック・タッチを促すときにも用いられうるということがわかった。

従来、ダイナミック・タッチは個人の認知の問題として取り扱われてきた。しかし、揺する動作は、視覚的な情報を持ち、さらに動作のタイミングと前後して発話を随伴させることによって、視聴覚的なできごととなって他者に表出されるという側面を持つ。本発表では、ダイナミック・タッチが重さの評価と共に起ることが確認され、発話のタイミングによって、発話の選好性が変化することが示唆された。今後、こうした個人の認知に随伴する動作や発話が、相互行為にどのように取り入れられていくかをさまざまな事例において検討する必要があるだろう。

#### 参考文献

- [1] Turvey, M. T., & Carello, C. (1995) "Dynamic touch.", *Handbook of Perception and Cognition*, Academic Press, pp. 401-490.
- [2] 『日本語日常会話コーパス』  
<https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html>
- [3] 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2023) “『日本語日常会話コーパス』設計と特徴”, 国立国語研究所論集, Vol. 24, pp.153-168.
- [4] Endo, Tomoko (2018) "The Japanese Change-of-State Tokens a and Aa in Responsive Units", *Journal of Pragmatics* Vol. 123: 151-66.
- [5] 細馬宏通 (2005) "対話における応答詞「あ」の機能: 発し手にとっての「新規情報」は相互行為にどう利用されるか?", 社会言語科学会大会第16回大会論文集, pp.67-70.
- [6] 高木智世・森田笑 (2021) "問題性への志向を示すメタ相互行為的スタンス標識としての「まあ」", 社会言語科学, 2021, 24 巻, 2 号, p. 67-82
- [7] Pomerantz, A. (1984) "Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shaped", In M. Atkinson, & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 57-101.